

学生による授業評価を理解するための個人差要因

杉浦 義典

人文学部 (内線: 7137)

ysugiur@shinshu-u.ac.jp

要 旨

学生による授業評価について、心理測定の見地から考察し、個々の評価項目への回答に影響する個人差変数を考慮する必要性と意義について論じた。個人差変数には、授業評価の結果の妥当性を損ねるものもあるが、逆に積極的に個人差変数を考慮することで、学生の個性をも考慮した授業評価が可能になるだろう。このような検討に有用となるであろう個人差変数の例として、ビッグファイブ、自己効力感、マインドフルネス、素朴な知能観について紹介した。「この授業は、このような学生に満足感が高い」といった授業の特徴が明らかになれば、学生による科目の選択、教育目標の設定、さらには受講経験を通じた自己理解が促進されることが期待出来る。

キーワード

授業評価, 妥当性, パーソナリティ, 質問項目, 心理測定

心理学からみた授業評価

学生による授業評価は、現在では多くの大学でも行われており、授業評価を請け負うビジネスも存在する段階に至っている。しかし、行った評価結果をどのように意味付け、利用するのかに関しては混乱も見られるようである。

授業評価は、質問文(例. 参考書の提示など、この授業のための授業時間外学習の情報提供・指示が、シラバスや授業中の説明等で与えられていたと思いますか)を提示して、同意する度合いを評定させる項目に、自由回答式の質問(例. この授業について、改善すべきと思うことがありましたら書いてください)を併せたアンケートとして行うことが一般的である。これは、心理学の研究で用いられる質問紙調査と同じ形式である。そもそも、授業という教員の行動を、学生の主観的な評価を用いて測定する授業評価は、心理測定にほかならない(同じ意味で、学生の学力を期末テストなどで評価することも心理測定である)。すると、学生による授業評価の結果を適切に生かすためには、学生がアンケートに回答する心理プロセスについての基礎研究が必要である(溝上, 1998)。

授業評価の結果は、授業と関連のない要因でも左右される(溝上, 1998)。例えば、「講義を熱心に聞いたか」という学生自身の評価は、授業への満足度と強く相関している。当然ながら、個人的な理由で授業を真剣に聞かなかった学生の評価に影響されないことが重要である。その対応策として溝上(1998)は自由回答式の質問の使用を推奨している。授業をきちんと受けていなければ、「おもしろかった」、「つまらなかった」といった単純な反応以上

をすることは難しいだろう。

ただし、自由回答式が良いのか、あるいは評定法（のような構造化された方法）が良いのかは一概に優劣をつけられるものではない。評定式の質問紙は、心理学では多様されており、そのノウハウを援用することで評価項目自体を評価することが可能である（杉浦，2000，2003）。評定式の質問への回答が、どのような心理学的過程を反映するのかを評価する作業は、尺度の妥当化とよばれる。妥当化の方法は非常に多数あるが、多くの場合、ある尺度の得点と、他の関連する変数との相関を検討する（杉浦，2000，2003）。例えば、学生自身の授業態度と授業の満足度が相関することは、この項目の妥当性に若干の注意が必要であることを示している。しかし、授業評価がそもそも主観的な評価によっている以上、学生の個人的要因が影響することは不可避であり、むしろどのような要因が評価の個人差を決めるのかを考察することが有益である。

授業評価において個人差を考慮する意義

授業評価の項目の中でも、「この授業はシラバスから大幅に逸脱することなく実施されたと思いますか」といった項目に比べて、「この授業の達成目標である、探求の仕方・姿勢、知識や技術などを、あなた自身は獲得できたと思いますか」、「この授業では、担当教員の学問的・専門的識見が感じられたと思いますか」といった項目には学生の個人差がより反映されやすいだろう。むしろ、積極的に個人差要因も含めて検討することが授業評価項目の利用価値を高めるであろう。つまり、「このような人には、このような授業が満足出来る」、「別の人には、別のタイプの授業が満足出来る」、といった適性-処遇交互作用を明らかにするのである。その方法として、個人差変数と授業評価との相関を検討することが考えられる。このような研究には、いくつかのメリットが考えられる。(1)学生にとっては、より適切に授業を選択する手掛かりが得られる。(2)教員にとっては、受講者の性質も想定しながら、詳細に授業目標を設定することが可能になる。(3)受講経験を通じて、学生の自己理解を促進出来る（例、この授業に満足出来たから、自分は〇〇なタイプかな）。

授業評価と関連しうる個人差要因

以下では、授業評価と関連しうる個人差要因の例を紹介したい。あくまで、想定される関連についての仮説ではあるが、授業への満足度などに対する個人差要因の影響を考察する手掛かりになるだろう。

ビッグファイブ

パーソナリティを測定するテストには、臨床的用途に即したもの、適性診断に向くものなど多数あるが、一般的に幅広く測定できるものとして、近年ビッグファイブが注目されている（John & Srivastava, 1999）。ビッグファイブは以下の5次元からなっている。

1. 情緒不安定性は、否定的な感情を経験しやすい傾向である。特に不安の強い傾向がある。不安の強い人は、他者から評価される場面を苦手とする。また、分析的で細かい思考を

好む傾向がある。

2. 開放性は、知性、創造性、柔軟性といった傾向である。いわゆる知能よりも遊び心や冒険心といった性質が強調されている。開放性の高い人は、あまり制約をかけずに自由にディスカッションをするといった授業を好むと考えられる。好奇心が強いため、「問題解決」が前面にでる授業を好むであろう。逆に、開放性の低い人には、そのような授業は不安を喚起するかも知れない。

3. 誠実性は勤勉な努力をする傾向である。秩序を好む傾向があるため、誘惑に負けずに努力する傾向がある。しかし、講義の話が脱線しがちであると、不満感を抱く可能性がある。

4. 調和性は他者と調和のとれた穏やかな関係をもとうとする傾向である。人と接触することを好むため、教員や他の受講生と親密な関係をもてる授業を好むと考えられる。

5. 外向性は外に興味をもち活動的な傾向である。いわゆる社交性には限定されず、自分の外に多くの刺激を求めるタイプである。よって、映像などを多用したり、フィールド体験を含む授業を好むと考えられる。淡々と講義が続くと退屈しがちである。逆に内向的な人は、一見地味な授業にも、興奮を感じる事が出来る。

近年では、ビッグファイブを枠組みとして、既存のパーソナリティ概念を整理する試みが頻繁に行われている(辻ら, 1997; 和田, 1996)。例えば、向山(1998)は、職業適性と関連するパーソナリティも、ビッグファイブの中に整理出来ることを見いだしている。よって、ビッグファイブを用いた検討を積み重ねれば、授業への反応から、職業適性をある程度までは予想出来る可能性もある。

自己効力感

自己効力感は、困難な状況において、それを打開するための方略を実行出来る、という自信を反映する。自己効力感が高い場合、不安が低減し、行動が積極的になるなどの様々な適応的变化が生じる(Bandura, 1977, 1995)。つまり、苦境におかれたときの粘り強さを反映すると考えられる。例えば、心理学専攻の場合、統計学が必須であるが、文系の学生にとってはかなりの重荷である。このような授業を投げ出さずにこなしていける傾向であると考えられる。

マインドフルネス

人が学習をする動機は様々に分類されるが、代表的な分け方は外発的動機と内発的動機という区分である。前者は、他者からほめられる、といった学習そのものでない要因による学習であり、後者は純粋な興味など、学ぶこと自体に対する動機づけである。

近年、内発的動機づけに関連する概念として、マインドフルネスというものが登場してきた(Bishop et al., 2004; Brown & Ryan, 2003)。我々は、日ごろ自分の将来や様々な心配に対して注意を向けがちである。これに対して、マインドフルな状態とは、今現在の、目の前にある現実に注意を向けることをさしている。マインドフルな意識を涵養すると、柔軟なものの方が可能になり、これまで見えなかった物事の良い面も見えるようになると考えられる。つまり、マインドフルネス傾向が高いと、学ぶことそのものをより楽しめるようになると期待される。

素朴な知能観

科学的な研究成果の知識とは別に、多くの人は自分なりの知能に関する考え方をもっている (Dewick & Sorich, 1999)。そのような素朴な知能観は大きく2つに分けられる。(1)知能は固定した実体であり、変化することはない。(2)知能は磨けば向上する。難易度の高い授業があった場合、(2)の人は知能を向上させるチャレンジングな機会と捉えるが、(1)の人にとっては自分の能力を露呈させる脅威でしかない。

個人差要因を考慮した授業評価の効用

本論文でとりあげた個人差変数と授業評価項目との関連は、個々の授業に特異であると考えられる。つまり、この授業では〇〇傾向の高い人は、探求の仕方・姿勢、知識や技術などを獲得できたと考えやすい、というように、相関に授業の個性があらわれると期待される。これは、単なる平均値よりも豊かな情報をもたらし、気づくことが難しい授業の特徴をも明らかに出来る可能性がある。しかし、あらゆる授業を通じて一貫した関連を示す変数が存在する可能性もあり、今後の検討が重要である。

個人差要因から、授業評価を考えるという発想は決して新しいものではない。むしろ、心理測定学と教育実践の接点にあたる教育評価という分野ではおなじみの内容である。しかし、昨今の大学を巡る状況の変化の中で急浮上した授業評価では、アンケート結果だけが一人歩きするという問題がある。授業評価のユーザーである学生や教員に、心理測定という方法への興味を喚起することができれば、本論文の目的は達成されたと考える。

今後は、実際にパーソナリティ変数と授業評価の項目をあわせて実施することで、平均値だけでは見えて来ない授業の特徴が見えてくるだろう。ただ、このような形のアンケートの実施は、質問紙調査に慣れていないとなじみにくい部分がある。また、質問紙調査を専門とするものにとっても、相当の労力をともなうものである。よって、すべての授業で頻繁に行うことは現実ではない。しかし、そのような試みをいくつか実践することで、アンケートというものの仕組みを理解し、自分に引き付けて興味をもってもらうことは、高等教育機関として健全な取り組みであると思われる。

引用文献

- Bandura, A. 1995 Comments on the crusade against the causal efficacy of human thought. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 26, 179-190.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Bishop, S. R., Lau, M., Shapiro, S., Carlson, L., Anderson, N. D., Carmody, J., Segal, Z. V., Abbey, S., Speca, M., Velting, D., Devins, G. (2004). Mindfulness: A proposed operational definition. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 11, 230-241.
- Brown, K. W., & Ryan, R. M. (2003). The benefits of being present: Mindfulness and its role in psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 822-848.

- Dweck, C. S., & Sorich, L. A. (1999). Mastery-oriented thinking. In C. R. Snyder (Ed.), *Coping: The psychology of what works*. New York: Oxford University Press. Pp. 232-251.
- John, O. P., & Srivastava, S. 1999 The Big Five trait taxonomy: History, measurement, and theoretical perspectives. In L. A. Pervin & O. R. John (Eds.), *Handbook of personality (2nd Ed.)* New York: Guilford. Pp. 102-138.
- 溝上慎一 1998 授業改善に役立つ授業評価—学生が授業を評価する内面プロセスを洞察する—
第4回 '98FD フォーラム報告集—授業計画・教授法等の研究交流会—
- 向山泰代 1998 FFPQ と SDS 職業適性自己診断テストとの関係 辻平治郎 (編) 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房. Pp. 181-196.
- 杉浦義典 2000 質問紙法 下山晴彦 (編) 臨床心理学研究の技法 福村出版 Pp.216-224.
- 杉浦義典 2003 検査法 (1): 質問紙法 下山晴彦 (編) よくわかる臨床心理学 ミネルヴァ書房 Pp. 38-39.
- 辻平治郎・藤島寛・辻斉・夏野良司・向山泰代・山田尚子・森田義宏・秦一士 1997 パーソナリティの特性論と5因子モデル—特性の概念, 構造, および測定 心理学評論, 40, 239-259.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

謝辞

資料を提供いただいた人文学部の菊地聡先生に御礼申し上げます。